

【論文】

『ユーマ』における主人公のアイデンティティ形成をめぐって

結城 史郎

はじめに

ラフカディオ・ハーンの小説『ユーマ』(Youma, 1890)には、「西インドの奴隷の物語」(The Story of a West-Indian Slave)という副題が付けられている。「西インド」とはフランス領マルティニークのことで、「奴隷」とは混血の黒人女性である表題のユーマを指している。ユーマはマルティニークの街サン・ピエールで、白人の子どもマイヨットの乳母(ダー)として、豊かな暮らしを送っていた。しかしながら、マイヨットの健康の都合で農園へ移り、ユーマはその外働きの奴隷頭のゲイブリエルと恋に陥る。そして二人は結婚を誓うが、所有者の白人に反対され、自分には自由がないことを意識していらだつ。

にもかかわらず、黒人奴隷の反乱が勃発し、マイヨットを連れ白人の邸宅に避難している折、焼き討ちに遭う。そのとき、白人たちから離れるなら、命を助けるとの条件を提示されながらもそれを拒否する。ユーマのこれまでの働きに感謝の念を抱くマイヨットの父親も、ひそかに逃亡するよう助言する。またゲイブリエルも命がけの救出を試みる。それでもユーマはマイヨットをかばい、聖母のような姿で死を選ぶ。このユーマの選択は奴隷としての認識とは無縁と思われる。どのような心情が作用したのだろうか興味深い。

そこで本稿ではまず乳母としてのユーマの存在を包む精神風土を検討したい。そしてユーマの乳母としての役割が二つの文化、すなわち白人と奴隷という対照的な文化の交点にあり、彼女のハイブリッドの意識の深層を探ることにする。さらにユーマのアイデンティティ形成の問題を探るため、結婚問題をめぐる彼女の個人としての葛藤に目を向けたい。そして最後にユーマの自己犠牲を論じ、この小説におけるハーンの視点を再考することとする。

(1) 乳母としてのユーマを包む精神風土

ユーマは乳母であった母親が亡くなった後、母親が世話をしていた自分と同じ年の娘エメーと一緒に育てられる。そしてエメーが結婚するとき、ユーマも彼女に付き従って婚家に赴いた。だがエメーは娘マイヨットを残しほどなく亡くなり、ユーマはマイヨットの乳母となる。乳母の社会的な地位は格段に高く、ユーマは人々から賛美されている。そしてユーマもその地位に満足していた。そのことは物語のエピローグで、早くも以下のように述べられている。

The da, during old colonial days, often held high rank in rich Martinique households . . . The da a slave; but no freedwoman, however beautiful or cultivated, could enjoy social privileges equal to those of certain das. The da was

respected and loved as a mother: she was at once a foster-mother and nurse. For the Creole child had two mothers: the aristocratic white mother who gave him birth; the dark bond-mother who gave him all care. (261)¹

乳母は奴隷であるにもかかわらず、白人の子どもにとって、母にも等しい存在であった。そのためユーマも婚家のデリヴィエール氏から、大切にされていた。そのような大らかなでのびやかな暮らしにおいて、ユーマは知らぬ間に、白人の文化を吸収していく。奴隷であることにいささかも疑問を抱くことはなかった。そのユーマにアイデンティティの問題を突きつけたのが、ゲイブリエルである。大蛇に襲われた折、ゲイブリエルに救助され、彼に心を惹かれることになった。だが奴隷にも階級があり、肉体労働に従事する外働きのゲイブリエルとの結婚は主人であるエマーの母親ペロンネット夫人からは認められない。ユーマの結婚相手はもっと地位のある人物でなければならないと言われる。ユーマが奴隷であることを意識するのはその瞬間であった。こうしてユーマは乳母としてマイヨットを守るか、それとも自由な世界へ逃れるか葛藤することになる。

奴隷の反乱が起こり、ユーマが身を寄せていた白人の家に火が放たれることになるのは、そのような折のことである。暴徒と化した黒人たちは奴隷であるユーマは助けようとするが、白人の少女であるマイヨットの脱出は認めないという。そのような事態を前に、ユーマは毅然とした態度で、乳母として世話を託されているマイヨットを守ることにする。恋人のゲイブリエルが窓辺で救いの手を差し伸べたにもかかわらずであった。そしてユーマはマイヨットを抱きしめながら、崩れる建物の中で消えてゆく。ゲイブリエルの目にはその姿が聖母のように映る。それは黒人たちが崇敬している黒マリアのように思われる。

Then a sudden light flared up behind her, and brightened. Against it her tall figure appeared, as in the Chapel of the Anchorage Gabriel had seen, against a background of gold, the figure of Notre Dame du Bon Port . . . Still her smooth features expressed no emotion. Her eyes were bent upon the blond head hiding against her breast . . . Youma drew off her foulard of yellow silk, and wrapped it about the head of the child: then began to caress her with calm tenderness . . . Never to Gabriel's watching eyes had Youma seemed so beautiful. (369-70)

このようにユーマは慈しみ深い乳母として、社会的に地位の高い存在として語られ、最後には聖母にも相当する女性としての生涯を全うする。そうしたユーマの姿を知るため、奴隷解放の事情を扱った作品を参照しておきたい。一つはマーガレット・ミッチェルの1936年刊行の『風

と共に去りぬ』で、もう一つはジーン・リースの1966年刊行の『サルガッソーの広い海』である。前者はアメリカの南北戦争を描き、後者はジャマイカの黒人暴動を扱っている。それぞれのヒロインには乳母がいる。スカーレットには乳母マミー、そしてアントワネットには乳母クリストフィーヌがいる。いずれの乳母も動乱が起こりながらも逃げることなく、ヒロインに力添えをする慈しみ深い乳母である。にもかかわらず、マミーもクリストフィーヌも、ユーマのように聖母として神格化されることはない。

ミッチェルの『風と共に去りぬ』では、主人公のスカーレットと乳母マミーとの関係は親密である。スカーレットは母親を尊敬しているが、心を許し、甘えることのできるのは乳母マミーのみである。奴隷解放をめぐる南北戦争のさなかでありながら、二人の間には白人と黒人という人種観が入り込む余地はない。マミーは徹頭徹尾スカーレットや彼女の一家につくしている。そうしたマミーは奴隷解放を唱える人々にとり侮蔑の対象にちがいない。それでもマミーの拠点はスカーレットの農園タラであり、外の世界はほとんど意味をなさない。マミーはスカーレットの乳母であり母でもある。彼女にはスカーレットを守る力はないし、神格化されるはずもないが、それでもスカーレットに対する慈しみにおいてはユーマと変わりはないだろう。

一方、リースの『サルガッソーの広い海』は、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』を標的にした作品である。ブロンテの作品にはバーサという狂女が屋根裏に幽閉されているが、この女性はジャマイカ出身で、リースもジャマイカ出身ということもあり、ブロンテの描写への不満があった。バーサの心の内には奴隷の反乱により焼き討ちを受けた経験が鬱積している。リースはそのことを描き、バーサの心の内を探ってみせている。バーサは白人と黒人との対立による精神的痛みを背負って心を病んでいる。それを知り見守っていたのが乳母クリストフィーヌで、イギリスに連れられ幽閉されるまで、アントワネットの心の支えとなっていた。このように、乳母の存在は大きい。クリストフィーヌもマミーのように神格化されることはないが、乳母としてアントワネットを慈しむ情愛においては変わらない。

ちなみに、中村和恵氏は「黒人の乳母——ラフカディオ・ハーンとジーン・リース」という実にあざやかな論考で、二人の作家の連結を探りながら、ユーマはクリストフィーヌを下敷きにしているのではないかとの推論により、以下のように述べている。

小説『サルガッソーの広い海』に出てくる黒人の乳母クリストフィーヌのほうは・・・クレオール白人の女主人を身を挺して守る、愛情に満ちた乳母である。この人物の造形に、わたしはなにか不思議な感じを抱いてきた。クリストフィーヌはリースの物語の登場人物としてはやや例外的である。カリブ海を舞台にしたリースの物語で、白人女性をこのように徹底的に庇護する黒人はほかに見あたらない。黒いドレスを引きずって優雅に歩く、この強靱な意志をもったヒロイックな女性像は、どこからわいてき

たのだろう？ 頭に巻いた黄色いハンカチーフを独自のかたちで結んで、金の重いイヤリングをつけたクリストフィーヌの服装は「マルティニーク風」であるという。彼女はマルティニークから連れてこられた女なのだ。そして「彼女には一人だけ友達がいた——マイヨット(Maillotte)という女だったが、マイヨットもジャマイカの女ではなかった」。ひょっとしたら——まったくのおもいつきだが——クリストフィーヌの人物像にユーマの影が差しているということはないだろうか。あいまいな類推だけで性急に結論を出すわけにはいかない。ただこれは間違いないと繰り返しておきたい——ハーンとリースはカリブ海について「同じ話」を共有している。²

作者ジーン・リースはドミニカ出身のクレオールであり、広大な農園経営の娘として、1844年の黒人暴動を経験している。ドミニカはマルティニークの北30キロほどの島で、マルティニークの事情も伝えられていたらしい。中村氏の指摘は説得的である。クリストフィーヌはアントワネットには慈しみ深い、聖母に相当するような自己犠牲の側面は欠けている。それでも、リースとハーンの連続という着想は斬新である。断定はしていないまでも、リースの物語の背景にハーンが揺曳していることは間違いないだろう。

ここでユーマの状況に戻りたい。ユーマはクレオールと黒人奴隷の間を取り持つ交点である。それは混血であるといった身体においてだけでなく、それにとまなう文化においても言える。ユーマのアイデンティティの問題の前提として、彼女のハイブリッドの位置に目を向けたい。ハーンはユーマを賛美しているように思われるが、ユーマの決断にはハーンの黒人蔑視があるように思われる。

(2) 二つの文化の交点としてのユーマ

実は、マイヨットが虚弱であったため、ユーマとマイヨットは、エメーの夫デリヴィエール氏の経営する農園に移り住む。この農園はサン・ピエール市内とは違い、風光明媚な田舎で、暮らしものびやかであった。ユーマはマイヨットにお伽噺を聞かせてあげ、彼女の空想をはぐくんだ。田舎ののびやかな風土において、黒人奴隷たちは劣等であると見做されながらも、彼らを包み込む豊かさがある。

牧歌的な描写にあふれていると言うと、奴隷制という時代の環境にしては少しばかり美化されているとの疑義が出されよう。『風と共に去りぬ』というミッチェルの作品が批判されたのは、ストー夫人の『アンクル・トムの小屋』との比較において、奴隷制の実態が無視されたことによる。そのかぎりでは『ユーマ』における農園はエデンの園のように描かれて違和感を抱く読者もいる。たとえば、以下の記述には白人側のノスタルジーのような響きがあるかもしれない。

But at the time when the Desrivières owned Anse-Marine, plantation life offered an aspect very different to that which it presents to-day. On this estate in particular, it was patriarchal and picturesque to a degree scarcely conceivable by one who knows the colony only since the period inaugurated by emancipation. The slaves were treated very much like children: it was a traditional family policy to sell only those who could not be controlled without physical punishment. (277-78)

ともあれ、ユーマはこうしたのびやかな農園でマイヨットの世話を焼く。彼女の役割は乳母としてマイヨットの世話を焼くばかりか、物語を語り、自然の豊かさを目覚めさせることであった。幼いころの話は子どもの心に植え付けられ、その精神を構造化する。さらに言えば、自然に対する観察眼を広げることでもある。その話はヨーロッパから伝えられたものであれ、アフリカナイズされた部分も多く、そのかぎりでは、黒人奴隷たちと白人クレオールとの間の交点として、自然と文化を紡ぐ役割もしている。以下はユーマとマイヨットとの日常である。

Every da was a story-teller. Her recitals first developed in the white child intrusted to her care the power of fancy—Africanizing it, perhaps, to a degree that after-education could not totally remove—creating a love of the droll and the extraordinary. One did not weary of hearing these stories often repeated;—for they were told with an art impossible to describe; and the little songs or refrains belonging to each—sometimes composed of African words, more often nonsense-rhymes imitating bamboula chants and caleinda improvisation—held a weird charm which great musicians have confessed. (282)

そのような乳母としてのユーマにマイヨットは安心を抱く。そして黒人の子どもと同じように遊ぶことのできないことを嘆き、ユーマのような肌であれば、自由に走り回れるとの願望を抱く。人種偏見に汚染されていない、美しい会話である。

“I wish I was a little negress,” she said one day, as she watched them from the porch.

“Oh!” exclaimed Youma in astonishment . . . “and why?”

“Because then you would let me run and roll in the sun.”

“But the sun does not hurt little negroes and negresses; and the sun would make you very sick, doudoux . . .”

“And that is why I wish I was a little negress.”

“It is not nice to wish that!” declared Youma, severely.

“Why is it not nice?”

“Fie! . . . wish to be an ugly little negress!”

“You are a negress, da—or nearly the same thing - and you are not ugly at all. You are beautiful, da; and you look like chocolate.”

“Is it not much prettier to look like cream?”

“No: I like chocolate better than cream . . . tell me a story, da.” (285-86)

このように、ユーマとマイヨットとの間には心の交流が広がる。その間の結びつきは黒人奴隷と白人クレオールといったボーダーを崩すものであっただろう。そしてこの風土を支えるのが民話である。『ユーマ』という物語の欠点として挙げられるのがハーンの民話への関心である。小説であるならば、物語の展開に力点が置かれてしかるべきであるが、ハーンは共同体を紡ぐ物語に関心を向けているという。こうした議論はそれなりに興味をそそられるが、人々を結びつけ、その意識を形成するのは共同体の物語である。それはユーマについてもあてはまる。

その一方で、ハーンは農園での奴隷たちの日常を描くことはしていない。さとうきび畑での労働も、その運搬も読者には伝えられない。奴隷解放が実施されているそう遠くないドミニカ島への逃亡も、不可能であるとされている。逃亡奴隷は銃殺されるのが常である。そうであるなら、マルティニーク島はエデンであるよりも、牢獄であるはずだ。奴隷の反乱はそうした社会への不満の表れであるだろう。こうした空白を基礎にユーマの葛藤を検討したい。

(3) ユーマの葛藤とアイデンティティ

ユーマは共同体の中で乳母という地位に満足している。それでもユーマも自らのアイデンティティに疑問を抱くことになる。それはゲイブリエルとの結婚の約束をめぐり、彼女が奴隷であり、選択の自由がないことに気づいたときに訪れる。彼女の所有者はペロンネット夫人で、ユーマの将来のため、ゲイブリエルのような外働きの男ではなく、もっと豊かな男との結婚を願っていたためである。

あまつさえ、マイヨットの教育のこともあり、ユーマの結婚問題を契機として市内に連れ戻すよう言われる。そして結婚の拒絶を聞き、ユーマは奴隷としての立場を意識し、そのきつなに圧殺されている魂の自由を想う。ダーと呼ばれる乳母として社会的地位は高いものの、自由

がないことを実感する。このあたりの事情は以下の自問にも明らかだ。

To Youma this decision brought a shock of pain that stupefied her too much for tears. Then, with the instinctive, automatic resentment that sudden pain provokes, came to her also for the first time the full keen sense of the fact that she was a slave—helpless to resist the will that struck her. Every disappointment she had ever known—each constraint, reprimand, refusal, suppression of an impulse, every petty pang she had suffered since a child—crowded to her memory, scorched it, blacked it; filled her with the delusion that she had unhappy all her life, and with a hot secret anger against the long injustice imagined, breaking down her good sense, and her trained habit of cheerful resignation. In that instant she hated her godmother, hated almost hated M. Desrivieres, hated everybody . . . except Gabriel. (308-09)

ゲイブリエルが奴隷解放をすでに実現している、英国領のドミニカ島へ逃亡する計画を提案するのはそのような状況においてである。しかしその提案にユーマはとまどう。これまでの生活を振り返り、自分を慈しんでくれた白人クレオール的主人への道義を意識し、すべてを捨て去ることは自分を育ててくれたペロンネット夫人たちに不実であるとも思う。こうしてユーマはゲイブリエルとの逃亡にためらい、彼から奴隷制度の非人道的な側面に目を向けるよう説得される。ユーマの意識は白人に頭脳を支配されたため、奴隷制度そのものを否定すべきだと言われる。ゲイブリエルの主張はもっともなことである。にもかかわらず、黒人奴隷の声はほとんど描かれていない。ハーンには白人の文化の凋落に関心があったしか思われない。

折しも、黒人たちの奴隷制度を打破する動きが密かに始まっていた。ユーマのとまどいは続く。実のところ、物語は 1848 年のことで、フランスが奴隷制度廃止に踏み切った年でもあった。より正確に言えば、フランス政府の奴隷廃止は 1848 年 4 月 27 日のことで、その書面がマルティニーク島に到着するのは同年 6 月 4 日のことであった³。ということは、法的な認可が下される前の暴動であり、黒人たちによる白人への恐怖が前景化された事態の描写になっている。ハーンは無秩序な黒人暴動とともに、この暴動によって崩壊する白人文化の交錯を視点に入れていただろう。

市内では「白人を殺せ。白人を倒せ」という怒号が響く。自由への願いはすべての奴隷たちのものでもあった。市内の商業活動は停止し、暴動を恐れた白人の数家族が知人宅に集まった。デリヴィエール氏もユーマとマイヨットを連れ、その家に身を寄せた。そしてデリヴィエール氏はユーマに黒人たちのところへ避難するよう勧める。にもかかわらず、ユーマはその場に踏みとどまる。ユーマはこのとき自らの定点を意識したと思われる。奴隷制度は悪であるにせよ、

暴動と手段には首肯できないものがある。かくしてユーマはこれまでの経歴を想い、自己犠牲を覚悟したのだろう。最後にその決断を検討したい。その一方で、ユーマの決断が意味を持つとしたら、それは黒人奴隷の暴動におびえる無垢な白人の文化を擁護する行為とも思われる。

(4) ユーマの自己犠牲

物語の冒頭部で、乳母の自由の問題が語られている。乳母は自由を与えられようと、それを受け入れる人はいない。それほど乳母は白人の家族から大切にされていた。そのためユーマがゲイブリエルの主張を受け止めたにせよ、彼女の精神には白人の社会の意識も息づいている。

When freed by gratitude—pour services rendus—she did not care to make a home of her own: freedom had small value for her except in the event of her outliving those to whom she was attached . . . She was unselfish and devoted to a degree which compelled gratitude even from natures of iron;—she represented the highest development of natural goodness possible in a race mentally undeveloped, kept half savage by subservience, but physically refined in a remarkable manner by climate, environment, and all those mysterious influences which form the characteristics of Creole peoples. (263)

この記述が必ずしも正しいわけではないことは、ユーマの自由をめぐるまどいに現れている。しかし物語はユーマの自己犠牲で終わっている。それは奴隷制度からの自由よりも、子どもへの愛着に促されたところが大きい。ユーマが聖母マリア⁴に重なるのはその点においてである。

にもかかわらず、そのような物語のクライマックスに感動しつつ、やはりそこには疑義をいだかざるをえないところもある。その一つがユーマへの偏愛である。その自己犠牲にはハーンが抱く母への想いが投影されているようだ。ユーマは混血で、美しい女性と描かれている。そもそもエグゾチックな美をたたえ、博愛主義者としての女性と提示されているのである。

その一方で、ユーマへの偏愛は純粋な白人、「ベケ」(beke)に対する愛着を肯定させている。彼女が彼らの世界やその崩壊を共有するとき、彼女には「ベケ」以外の人々、すなわち純粋な黒人奴隷、あるいは彼女のようなクレオールへの蔑視が見える。そしてベケの文化の崩壊への悲嘆も心のどこかに伏在しよう。ベケの崩壊はカリブの白人文化の崩壊にも等しい。

事実、この物語にもユーマが奴隷としての存在であることを自覚し、ゲイブリエルとの交流で悲嘆する。人間らしいとまどいである。しかし、そのとまどいは語り手によって答えられている。語り手はユーマにとまどわせることなく、またゲイブリエルの認識を深く考察することもなく、アフリカの文化遺産へのノスタルジーにすぎないものとして、彼の発言を一蹴してい

る。そもそもユーマを聖母像へと賛美するとき、彼女の役割は迫害を受ける白人に寄り添う結末になっている。ゲイブリエルの存在を否定し、乳母としての存在に自らのアイデンティティを認めるとき、彼女は自己を喪失しているとも言える。

もちろんこの語り手の背後には作者ハーンがいる。ハーンはマルティニークのクレオール文化を賛美しているが、その一方で黒人奴隷たちへの蔑視をもっていたはずだ。その点は批判的に読むべきだろう。ハーンはエグゾチックなものへの憧れがあった。その視点からすれば、ユーマに聖母像を読み取っていることになる。それに加え、さらにハーンはマルティニークの農園に対する記述が、後の作家の範例となったとは言え、そのまま受け止められることは不可能である。黒人の暴動の背景にはかれらの怨念が積もっていたことを推測しておくべきである。

ハーンはアメリカのシンシナティで混血女性と結婚し、それを認可しない法律のために離婚せざるをえなかった。そのような経歴を持つハーンにしてみれば、混血のユーマに温かい眼ざしが向けられているとしても問題はないが、ハーンは混血による美への賛美がありながら、黒人への侮蔑があったことは否定できない。ハイブリッドにより美を獲得したことへの賛美で、文化を担うのはあくまで白人であることは否定していない。ハイブリッドが肯定されるとしたら、それは美しい人種が誕生する場合に限られているということだ。そのかぎりでは、ハーンは少数の白人支配を容認していたことになるし、ユーマも白人支配の旧世界にからめとられたとも言える。その心理をめぐる以下の指摘を引用しておきたい。

Her 'civilized' self prevails. Youma's solicitude toward her mistress, her desire to remain a pure Mother figure for her white family, and her rejection of Gabriel, are some of the many ways she uphold the plantation system and white patriarchy. Indeed, she exemplifies the Foucauldian view that power such as colonial rule does not always need violence to impose its might; on the contrary, power is more effective when its expression is invisible and when it makes people want to conform to the norm or status quo. Youma, who had internalized her mistress's vision of the world, self-discipline her body and mind. She can only be the person that system had programmed her to be: *a da*.⁵

ケイト・ショパンの短編「デジレの赤ちゃん」(1893)で描かれているように、黒人の血への偏見もあったろう。ハーンがユーマを美化したとは言え、彼女をベケの側に寄り添わせることで、オリエンタリズム的な憧憬もあったのだろう。ハーンのクレオールに対する姿勢には、人種差別、植民者、父権的言説への支持があったと思われる。ハーンの『ユーマ』の読者対象は南北戦争後のアメリカの読者であったはずだ。これらの読者には苛烈な人種偏見があったが、

ハーンの功績はハイブリッドたちの美を讃えることであった。そこにはカリブの世界のエグゾティシズムを流布する意図もあっただろう。

それに加え、ハーンの『ユーマ』はカリブの文学の先駆けともなっただと思われる。1948年の独立百年祭に際しては、ハーンの『ユーマ』がセザンヌ・セザールにヒントを与えたという。この作品は著作権の都合から入手不能になっているが、ハーンの『ユーマ』が貴重な遺産であっただろう⁶。実のところ、サン・ピエールはハーンが亡くなった1904年、火山により消滅し、往時を知る資料は少ない。また1896年にはジェニー・マネにより『マイヨット』が書かれ、2009年にはI. シリラにより『ラフカディオ・ハーンの家政婦—1888年、マルティニーク、サン・ピエールでの会話』という作品が書かれている。これらはハーンのマルティニークを見る彼のレンズの偏見を再検討するよき材料である。いずれにせよ、カリブの文化にはインターテクスチュアルを構成する作品が充満している。

註

¹ Lafcadio Hearn, *Two Years in the French West Indies II: Chita and Youma* (Boston: Houghton, 1923) 261. 以下、このテキストからの引用は、本文中に頁番号のみ記す。

² 中村和恵、「黒人の乳母——ラフカディオ・ハーンとジーン・リース」、『国文学 解釈と教材の研究』49.11 (2004年・平成16年10月) 126.

³ Jacqueline Couti, *Dangerous Creole Liaisons: Sexuality and Nationalism in French Caribbean Discourses from 1806-1897* (Liverpool: Liverpool UP, 2016) 127.

⁴ 黒マリアは黒人が崇拝する聖母である。前作の『チタ』にも登場し、スペインやブルターニュにもあるとされるが、その起源やカリブでの伝搬については不明であり、今後の課題としたい。

⁵ Jacqueline Couti, *Dangerous Creole Liaisons* 139.

⁶ Kara M. Rabbit, “History into Story: Suzanne Cesaire, Lafcadio Hearn, and Representation of the 1848 Martinique Slave Revolts”, *Anthurium: A Caribbean Studies Journal* 12.2(2015): 1-17.